虫老ゆる午後

三浦悟朗

日曜日の午前中などにめったに起床することのなかった洋一は、その日は随分と早起きしたつもりでいたために、自宅を出てから最寄の駅までの道すがらずっと、始終不機嫌で偏頭痛のようなものに悩まされ続けた。歩くことさえ疎ましいほどだった。

私鉄に乗っていったんは逆方向のターミナル駅まで戻らなくてはならない。そして始発の快速に乗り替えてあらためて都下の町に向かう手間がある。しかも乗換えの便が悪く、ホームで何分も待たされたあげく、ようやく乗った電車は目的地に着く前に別の路線に入るものとわかり、次の駅で今一度乗り換え結局は鈍行で行く羽目になったのだ。馬鹿正直に各駅停車する電車に揺られ出始めたとたん、洋一疲れが出て寝てしまった。居眠りしたまま肝心の目的駅の直前まで目が覚めず、あやうく寝過ごしそうになった。低血圧で睡眠不足がこたえているのか洋一はふらふらと立ち上がって、発車寸前の閉じかけたドアから慌ててホームに降り立たなくてはならなかった。

私鉄沿線の長閑で小さな駅舎の先に、質素で狭苦しい長いホームが、甲府山脈のかすかに浮かんで見える山間に向かって間延びしている。

電車は再び、一息しゅっ、と吐き出して音もなく動き始めると、西に向かって滑り出した。

洋一はホームの上で二、三回だらしなく口を開けて大きなあくびをした。時計を見ると、ここまで二時間も時間を要している。この調子だとうかうかしていると帰宅するのが夜になってしまうだろう、急がなくてはならないと思った。休日のせいか構内には人の姿もまばらで、洋一はちょっとでも楽をしようと数人の降車した人の背中にくっつくようにして歩くと、段差のない階段を下り、日差しで明るい改札口を通って外に出た。

晴天の空に、風がいささか強く吹いている。

駅前の不動産屋のポップが強風に煽られ、時折パタパタパタパタと駅前に大きな音を響かせていた。

だいぶ前に一度だけ来ただけなので、洋一にはこの町のことはもうほとんど記憶がなかい。目的地までの行き方もおぼつかない。今度はバスに乗るのだ。駅前の広場を数度

行ったり来たりしながら乗るべきバスの発車場所を探し、ようやく目立たない街角の隅っこにあるバス停を見つけると、行き先の表示を確かめた。曇った緑色の車体の路線バスが、音もなく静かにロータリーに入って来た。これだと思った。ゆっくりと滑るようにして近づいてくると、かすん、と一つ鈍い音を放ってバスは洋一の目の前に停車した。

急いで財布を取り出し、千円札をくずし、つり銭をつかんで乗車口から乗り込んだ。ポップがまだばたばたばたと近くの道端で鳴り、町の頭上には眩しい青空が精一杯膨らんで清々しかった。駅前通りの広場を横切って紐の切れた風船が一個、そしてもう一個飛んでいった。気候は春のようでもあり秋のようでもあるなんともいえない寒さが町にあった。

スタートしたバスに揺さぶられながら、洋一は止まらないあくびを何度かして、狭い座席に身体を沈めながら外景を眺めた。久しぶりに見る町の広場は穏やかな日差しで光り輝き、きちんと区画された道路が造作なく広がって退屈な風景をつくっている。長閑な、田園風景のような、だらんとした陽光が町中に照っている。小さなケーキ屋店、大きな赤いポスト、鳥越商店街の名を掲げた狭いアーチ、時代遅れの店名の喫茶店、無数に伸びているいくつもの脇路地、買い物袋を持って背中を丸め杖で歩く老女、狭い道を二人の子供を乗せて走る自転車の主婦、部活の練習が終わって帰宅途中の女子学生たち。日焼けした顔、日焼けした身体に真っ白のワイシャツで、通り沿いのコンビニの入口で座りながらカップラーメンを食べている男子学生たち。小気味よく狭い車線を通り過ぎていく軽自動車。

「次は舞坂植物園前、舞坂植物園前。大丸養老ホームへはこちらでお降り下さい」

洋一は、座ったままの体勢から体をひねって降車ブザーを押したため、腰をひねりすぎて少し腰が攣ったが、立ち上がって降車口の鉄棒にふらふらとつかまった。見たことのある鉄筋コンクリートの施設と塀が、ようやく前方から見えてきて少し安堵した。バスはバス停直前までスピードを落とさず、いきなり急停車し、洋一はその弾みで転げるようにして降り、危うく段差の激しい路肩につまずいて転びそうになった。

片側一車線の狭い旧国道沿いに、そのバス停はあった。

一様に見慣れた風景ではあるのだが、以前来てからずいぶんと時が経っていたので、正面玄関がどちらかもう忘れてしまっていた。

その前に、帰るときのために時刻表で上りのバスの時刻を一応確かめておかなければならない。洋一は飛ばす乗用車に用心しながら車道を渡り、反対側にあったバス停へ歩

いた。三十分に一本の割合で駅まで出ていることがわかった。ベンチの上に、誰かが置きざりにした雑誌が風で音を立てながら捲れていた。

ふとベンチの下に黒いつぶつぶの塊を見つけて、洋一は無意識に片足を退いた。

なんだだろう---、腰をかがめ目を近づけて見ると、その黒い粒の鎖は自分のすぐ足下まで伸びていた。しかも、動いている。何十匹という蟻の群れだった。黒い群れの真中に隠れるようにして、大きな黄色い蛾が紫褐色の紋のある羽を震わせながら横倒しになっていた。地面に伏し、鱗粉のふいたその周囲に黒い描点がせわしげに動いている。生き絶え絶えだが、まだ生きている。寿命が尽きる寸前の蛾に襲いかかり、蟻たちはさかんに肢体に食いついている。微動する羽の付け根を咥えて巨大な餌の確保に自分たちの巣まで運び込もうとする群れは、みな全身で興奮を現していた。

ベンチのすぐ脇を車が猛烈なスピードで通り過ぎた。

しゃがみこんでいた彼は我に返って、立ち上がって、思わず冷たいアスファルトから目を離した。

車道は車の通行量は少ないが、通過する車両はほとんど制限速度を大幅に越えて飛ばしていた。この近辺には養護施設などが多く小学校や幼稚園もあり、老人、子供の横断する横断歩道と注意書きがあるのに、お構いなしだった。

洋一はバス停から離れて、再び通りを反対側に渡った。

左右に伸びている目の前の施設の塀が切れている場所を探した。入口がどちらの方向だったか。とりあえず彼は右へ、塀の短いほうへと歩くことにした。

すぐに塀の流れは切れて、狭い旧道から一本中に入った道は奥に行くほど先細り、しかしどこまでも続いて、施設の裏庭の外側に回っていた。入口は見当たらなかった。隣は水生植物公園と野草園、その向こうには城址自然公園が広がっている。

塀の手前に、乗用車が一台、あった。通りを見張るようにして停車していた。

洋一はいったん車の前を通り過ぎ、正面玄関がないのがわかるとまたもと来た道を戻って、車の前をもう一度通り過ぎた。半開きの窓の運転席から、動く気配がして思わず見ると、人が座っていることに初めて気づいた。深々とシートに腰をうずめている男が同じ姿勢のまま目線だけ動かしてこちらを向き、目が合った。青黒い地に紺の縦縞の背広を着て、派手な柄のネクタイを締めた三十代の男が鋭い視線で洋一を見返してきた。洋一は、足早に歩き、旧国道に急いで出ると塀の脇に添って今度は東側へと進んだ。しばらくいくとバス停からは見えなかったが、車道から引っ込んだところに正面入口の門

をようやく見つけることができた。
　三千平方メートル以上の施設は全体的に日当たりはいいのだが正面玄関にある事務所の入り口だけはちょうど日陰になっている。周囲には、この施設以外に三階建ての建物は見当たらない。緑が多そうでも、樹木は併設されている他の都の施設に比べるとむしろ少ないほうで、内庭の草地は整備され、塀沿いの雑木林は整然と造営されすぎているため、もしかしたらそんな印象を持つのかもしれなかった。
　早く用事を済ませたい人間のように、洋一は足早に敷地内に入り込み、事務的に板敷きの小さな玄関をまたいで、受付のガラス窓の前に立って、中の人影を覗き見た。「介護の必要な方、介護保険、介護一時金より充当。詳しくは窓口まで」「ショートステイ制度あり」「OO診療所、OO外科と提携」「寝たきりなど、痴呆になった場合は修身介護などの張り紙が事務的に掲示されている。事務所内の誰もが、洋一にはまだ気づいていない。
　粗い木目を露出した下駄箱が左右に並び、緑色の泥よけが無造作に真ん中に敷いてある玄関で靴を脱ぎ、早々とスリッパに履き替えると、ガラス越しにせわしくノックした。数人の従業員が事務机を並べ話をしている。一番奥の机の年配者は机上に一通の書類だけ広げて何度も読み返している。その上に、大きな文字で「真心と愛の奉仕で支える和」と掛け軸がある。ようやく洋一に気づいた水色の三角帽を被った白衣の中年女性が、細い目を上げながらスリッパを無規則に引きずり、だるそうに近づいて来た。
「はい、どちら様？　何かご用？」
　小さな窓口のガラス戸を細目に開けて、彼女自身も細い目を幾分か見開いて洋一を見た。
「田沢ウメの孫です。面会に来ました。こちらには昨日電話で来ることを連絡してあります」
　女性は洋一の目から、口元、首、胸と、視線を下げた後に、
「ああーー、ウメさん、ね？」
　後ろを振り返り、奥の席に座った眼鏡をかけた男性と少し頷き合ってから、無表情に、
「ウメさんなら場所が変わって、今は二階のＡの五がお部屋ですよ。そこんところの階段を上がって下さい」
　と指さした。
　玄関のすぐ脇に、灰色の階段が見えた。
「同室の方がおられますからね。お話は邪魔にならないよう気をつけて下さい。長くな

るようなら、皆さん、待合室を利用されてますから」
「わかりました」
洋一はどんな歩き方をしてもぺたぺたと音のする緑色のスリッパを打ち鳴らしながら、慣れない歩き方で階段を一段一段をゆっくりと上った。二階はワックスで不自然に光った通路が短く左右に分かれていた。食堂、喫茶室，多目的和室、保健室、サンルーム、洗面所、リハビリ室、介護室と続き、各部屋のドアに掲げられた部屋番号を順番に見て、Aの5部屋を見つけた。
ドアが閉め忘れのように少し廊下側に開き、かすかに中からテレビの音が漏れていた。入口からそっと洋一は中を覗いた。湿気たような、生暖かい空気がどんよりと洋一の顔を舐めるように漂ってきた。眼鏡をかけた小柄な老女が、ベランダ側の部屋に座ってテレビを見ているのが見えた。彼女の目の前の机上には蜜柑を盛った籠が一個置いてある。老女は、片手に湯飲みを握っている。そして時折大きく頷いて入れ歯を前後に動かした。田沢ウメは、手前の通路側の部屋で、履物の手入れをして一生懸命手を動かしていた。
「おばあちゃん」
ウメは不意に手を止めて、わずかに開いた隙間から洋一のほうを見ようと顔をのぞかせた。
最初の当惑した表情と目つきが、洋一だとわかるとすぐに懐かしそうな、嬉しそうな笑顔に変わって、反射的に立ち上がろうとした。しかし立ち上がろうとして腰がいうことを聞かないので、つかまるものを一生懸命に探して少しその場でよろけた。
「遅かったわねえ。二時に来るって言ってたから、待ってたんだけど。まあ、今か今かと思ったけど、よく来てくれたわねえ」
「ごめん、ごめん。遅れちゃって。電車に乗り遅れたから」
洋一は、二人の老婆に部屋の真ん中へ招かれて、大きな体を屈めるようにして小さな机の前に立った。　部屋は思った以上に小さく、飾り戸の擦り切れた木材が低い照明に照らされぴかぴか光っていた。部屋には年寄りの匂いが充満し、どこにももう流れようのない空気がどんよりと鼻先に停滞していた。年寄りの食器棚、年寄りの台所、年寄りの冷蔵庫、テレビや家具が空間をただ埋めているだけの小さな部屋。ウメに促されて、眼鏡をかけた上品なたたずまいの小柄な老女に、洋一はぺこんと頭を一度下げて挨拶した。自分のおばあちゃんに比べて、随分と上品な人だなあというのが正直な第一印象だった。所作、言葉使い、どれもばあちゃんより上だと感じて洋一は恥ずかしかった。

「まあちょっと会わないうちにこんなに大きくなって。どんどん身長も伸びて、ほんとびっくりしちゃうわね」
「高校生でいらっしゃいますか」
「今年卒業してました。今は浪人の身です」
勧められた座布団に座りながら洋一は苦笑して答えた。半開きのベランダのガラス戸からは、白い四角形の工場のような建物だけが見え、細い薄汚れた煙突から灰色の煤煙を真上に吐き出していた。空はいつの間にか曇って舞い上がった煤煙はその中で目立たなくない。ウメと眼鏡の老女は湯飲みでお茶を飲んでいたが、洋一がお茶でいいといっても、執拗に冷蔵庫からオレンジジュースがいいかい？コーヒーがいいかい？と勧められ、理由もなく烏龍茶がいいと言ってしまって生温い烏龍茶を飲む羽目になった。ウメは暗い色の布地の手提げ袋をがさがさと両手で探し回りながら、湿気たお菓子を取り出してはさかんに食べろ食べろと勧めた。いろんなお菓子が一個ずつ出てくる。そのうち煎餅が出てきてそれも湿気ていた。洋一は包装された菓子を選んで口に入れ、烏龍茶の缶にちびりちびりと口をつけた。
「やだなあ、曇ってきたわねえ。雨は降らないと思うけど。ぐずついた天気になると、困るわね」
眼鏡の老女が、
「きっと雨は降らないと思いますよ。天気予報でいってたから。でも念のため、お帰りのときは傘はお持ちになった方がよろしくて？」
「洋ちゃん、傘持ってきた？」
「いいや」
「じゃ、持っていきなさい。傘はいくつでもあるから」
そう言って玄関に行きかけて、傘だての中から鉄が錆びて変色しかけた傘をウメが取り出してきたので、慌てた洋一は、
「大丈夫だよ。降らないって。傘はいいから。大丈夫」
ウメは洋一が傘はかさばるから持ちたくないのだろうと思って、
「そういやあるから折畳が。これ-ここ、ほら、あった、これ、ねえ、ねっ！　返さなくていいから。持っていきなさい」
断っても断っても執拗に言うので、洋一は根負けして錆びで布が汚れた折畳傘を受け

取った。眼鏡の老女は、洋一の座っている薄っぺらな座布団を不憫に思ってか、
「これ、使いませんか。私、いいから。お座布団、ないほうがいいんで。安生しますから。これ、敷いてくださいな」
と、自分が座っていた座布団を引き抜くと洋一の足下に重ねた。
「いや、いいです」
「どうぞ、どうぞ、ねっ？　身体が大きいからお座布団が小さくてごめんなさいね」
「いや」
ウメが、
「いいわよ、いいわよ、私のあるから、あなたはそれ使って。私のこれ使いなさいよ」
自分の座布団を差し出して洋一の前の座布団を眼鏡の老女に返そうとした。洋一はされるままになってきて、結局ウメの座布団を重ねて敷いて座ることにした。眼鏡の老女の座布団は彼女が受け取らないので脇においてそのままになった。
窓の外の、殺風景な工場から立ち上っている煤煙を時々、洋一は沈黙が気まずくてガラス戸越しに眺めるしかなかった。真四角の工場が曇った空を背景に浮いて見え、その他は飛んでいる鳥たちの黒い隊形がすばしっこく飛行しているだけ。鳥たちは最後に三角形の陣営を回転させると幾つか旋回を繰り返して、遠い空の灰色の中に消えていった。
「今日は風が強いけど、もうすっかり夏が近づいてきましたねえ。なま温かくなってきちゃって、どうしたのかしら、風ももうずいぶんと夏らしくなってきて」
「そうねえ。洋ちゃん、暑くない？　冷房、入れようか」
「いや、いいよ」
「風は強いけど、なま温かいし。窓 開けようか。冷房入れなくても大丈夫？」
「いいよ、大丈夫だよ」
小さな旧式の赤いテレビは五、六人の落語家が話題のテーマを使って小話を披露し合う番組を流している。眼鏡の老女が楽しそうに口に手を当てて笑い声を上げ、湯飲みをこぼさないよう小さな手でしっかりと握り締めながら口に運んだ。ウメもそれを見て時折思い出したように笑っていた。洋一はみかんを一つつまみ、硬い厚い皮を剥くのにてこずりながら食べ、もう一個勧められたので、剥くのに神経を集中させながら口に押し込んだ。
「洋ちゃんは、これ、いらない？」
ウメが口を開いて彼の背中の後ろにある戸棚からなにやら取り出して、

「私、時計しないから、もう。良かったら、ねえ、これ持っててよ。洋ちゃん、時計するでしょ？　いらないなら、パパにでも使ってもらって」
包装のない、白い粗末な箱を開けて金時計を取り出して見せた。
「まあ、いい時計ですわね」
老女が言った。
「結構ねえ、立派かもしれないけど。私にはわかんないの。使わないの。洋ちゃん、どう？」
「なんで？自分でしないの？」
洋一が訝しがると、
「買ったのよ」
「使えば？」
「使わないの」
「何処で買ったの？」
「かわいそうだから買ってあげたの」
ウメは、もじもじしながら、気まずそうに「もうこれ売らないと、今日中に売って帰らないと、在庫になって大変だってねえ。会社で怒られるんだって。だから、安くするから、買ってくれないかって、言われて。私も困ったけど」
「あらまあ、どこで？」
粗末な包装箱で,時計自体も一見してまがい物とわかる。金張りに見えるが祭りで露天が千円で売ってるような模造品であることは洋一にもわかった。
「友達に？」
「いいや、車でね、車に乗った人で、この前、郵便局にお金預けに行く途中で、このすぐ
近くで話しかけられたの。この門のところのすぐそばで。〃おばあちゃん〃って声かけられて、“もう帰るところだけど俺、在庫がたまって、安くしとくから、一個だけでいいからどうか買ってくれないか”って。後生だからっていうもんだから、一個ねえ、どうしてもっていうんで買ってあげたのよ」
「まあ、お幾ら、したの？」
「二十万？　確か、二十万といってた。でも、それをねえ、五万でいいからって。安くするから。おばあちゃん、助けると思って、買ってくれないかって。ちょうどねえ、郵

便局に行く途中だったし。しょうがないから、買ってあげたの-」
「いい時計ですわねえ。金でねえ、見事な金で」
洋一は、新宿のガード下でこれと同じような時計を売っている外国人を見かけたことを思い出した。友達の話では香港製で原価は百円もしない。実際、ガード下では二千円で売っていた。
「その人、この施設の人?」
洋一は気になった。
「いいや、-----。知らない人よ。車に乗って、きちんと背広を着た、男の人。これ、もし洋ちゃん使わないようならパパにあげてちょうだいよ。ね? 私が買ったってことは黙っててね。ママにも言わないようにね。パパにも」
「うん---」
「このご時世で、すっかり売れないんですって、時計って。大変よねえ。何もかも。でも、家に帰ればそういう人も、あの人にも、奥さんとか子供がいて、大変だから。このままだと売り上げがだめで、本当に会社クビになるかもしれないって、本当に気の毒になっちゃったの。大変な世の中ねえ」
「大変で、ねえ。どこも、大変ですよねえ」
「箱に入れて持ってて。洋ちゃんしなければ、パパにあげればいいから」
「いや、いいよ」
「遠慮しないで。いいから、いいから」
「…わかったよ、じゃあ------」
「いいの、いいの、この箱に入ってたものだから。これに入れて、後は、その傘と一緒に
袋に入れて持っていければいいから」
ウメはそう言って押入れに立ってダンボールの中をごそごそと探しながら四つ折にした紙の包装紙を取り出し、畳の上において皺くちゃの手で丁寧に何べんも紙の皺を伸ばすと、洋一に渡した。
その時、ノックの音がして、
「００さん」
三角帽を被った受付の女性がドアの横から図々しそうな顔を突き出して、
「００さん、います?」

あら、あんたじゃない？　ウメに促されて、眼鏡の老女が、
「はーい」
慌てて声をあげて老女が腰を挙げた。ドアが大きく開いて三角帽が入り口に立ち塞がっている。
「００さん、お電話。実家から。息子さん」
「はいっ！」
老女は慌てて腰を上げ机に手をつきながら立ち上がり、部屋を出て行った。
「あの人も、かわいそうでねえ」
彼女が出てゆくと、ウメが顔を近づけて洋一に囁いた。
「息子さんのお嫁さんと合わなくて。結構ねえ、駿河のすごい家の出らしいんだけど。息子のお嫁さんとそりが合わなくて。喧嘩ばかりして。息子さんにねえ、ここに入れられちゃったのよ‥‥。ほんと、かわいそうで‥‥」
「‥‥そう」
「大きな喧嘩しちゃって、ここに無理やり連れて来られて、入れられたの」
「あの人でも、喧嘩するんだ」
知的な様相と礼儀正しい佇まいで、もの腰が柔らかい、。とても嫁と争うような姑には見えない。
「あれでねえ、案外強情だから。あの人も。一度言い出したか、聞かないから。でも、人はものすごくいいの。ものすごく人がいいから、騙されちゃうのよねえ」
真剣な顔つきでウメは声を落とした。
「ここねえ、ここの看護婦さんいるんだけれど。介護してくれて。一番えらい看護婦さんがいて、あの人、彼女にお金をかなりまとまって、お金、まとまった金額預けていたんだけど、なくなっちゃったのよねえ。ある日突然そう言われて。確か、あの時に幾らお預けしてありましたよねって。あの人、お金が必要になってある時看護婦さんに言ったら、いいや、預かってませんよって。にべもなく言われて、そうかなあ、あれえって。あの人、お人好しだから、大のお人よし。信じちゃって、そっくりそのまま預けちゃうから、またいけないのよねえ。私はそんなことしないから。私もね、一回、あったからそういうの。ほら、この前、去年？　急で市立病院に入院したでしょう？　具合が悪くなって。ママに来てもらったけど。あの時に、身に付けていた封筒、看護婦さんに預けたんだけどね、ないって。後から聞いたら、ないって言うの。そんなものないって言わ

れて。預かっていませんよって---。私、びっくりしちゃった。どうして？って思ったけど。もう、後の祭りだから。預けた、預けないって話になって。嫌でしょう？そういうのって。そういうのってやだからもういいですって。もういいです、わかりました。私の間違いでしたから、すいませんって謝ったの。でもねえ、確かに、預けたのよ。あの人に。間違いないの。看護婦さん、一番えらい人だから。たまたま、急な病気で、私、入院しちゃって。私も悪いんだけど。で、あの人、信用して、急なことだったから、預けてねえ、封筒を。封筒に、お金入ってたから---」

「--幾ら、入ってたの？」

「----うーーん、入ってたの。結構ねえ、あったから。私があることで貯めておいたお金だったの。別にしてちょっとしまっておこうと思って、そうしたら急に具合が悪くなっちゃって。倒れて。同じ部屋の人に頼めばよかったんだけど、ちょうどそのとき、その人はお風呂に行ってて、いなかったのよ。だから、頼めなくて。で、看護婦さんに渡したんだけど」

「取られたんだ？」

「うーん、そうは思いたくないんだけどねえ。まあしょうがないでしょう？ないんだから。もうねえ、頼まないから。いいの、頼まないことにしたから。絶対にね、きちんと管理して。こっちはこっちできちんとしないと。このことはママには黙っててね。心配するから---言わないで。心配かけるから。そんなことで騙されて、またなにやってるの！なんて言われちゃうから、あははっ。パパにもねえははっ、言わないでね。--あらっ、----お帰りなさい。大丈夫だった？　息子さんからだった？」

眼鏡の老女がドアを開けて戻ってきた。口をきつく結んで下を向いて黙っているが、洋一に向かっては軽く会釈した。黙ったまま炬燵机の前に座ると、彼女は仕方なさそうにテレビに顔を向けた。

「おばあちゃん、俺、そろそろ、帰るから-----」

言い出しにくいことを言い出すきっかけを得て洋一は腰を半分上げかけた。

「あら、まだいいじゃないの？　まだ暗くなってないし----」

ウメはそう言って背中の壁の時計を見た。

「今から帰ってちょうど夕食に間に合うぐらいだからさ。もう帰るよ---」

「そう---、そうねえ、ママも心配するから---。夕食だもんねえ---」

ウメは仕方なさそうにそう言うと、残念そうだが諦めた様子で腰を上げた。箪笥に近

づくと一番下の引出しから何かを取り出して、片手に握り締めた。
「じゃあ、そこまでちょっとね。いっしょに行ってきますから。あの、ちょっとこの子見送ってきますからね」
老女は、
「もうお帰りですか。まあ、残念だこと。またいらしてくださいね。お気をつけて、またいらしてくださいますか」
きちんと膝を揃えて座り直すと、老女は何もなかったかのような表情に戻って丁寧に頭を下げて、口を開け静かに笑った。
「また、来ます。失礼しました」
廊下に出ると、ウメがそっと洋一の手に紙包みを握らせた。洋一はようやく安堵してそれを掌にしっかりと受け取ると、わざとらしく、
「えっ？　なに？」
ととぼけて、少ないけどなんかに使ってねと言うウメの言葉を聞いてから、ああ、いいの？と曖昧に答え、ズボンのポケットに素早くしまいこんで、階段を下りた。
足取りが軽くなって、足早に降りてしまい、後ろを振り返るとウメはまだかなり上の段上にいた。ゆっくりと慎重に手すりにつかまりながら、足を下ろしているウメを見上げながら、洋一はもうここでいいよ、見送りはと言いながら膝で貧乏ゆすりした。
もうここらへんでいいよと言う洋一の言葉を振り切って、ウメはやはり施設の入り口まで出てきて、いつまでも洋一の後姿を見送った。振り返るたびに、ウメは立ったまま手を振ってくれた。すっかりうす暗くなりかけた町並みの歩道を進んで、車道を斜めに横断してバス停まで歩いた。入り口の門から申し訳なさそうにウメがまた顔を出し、まだ手を振っているので、洋一がもういいから、もう帰ってよと手振りで示すと、ようやくウメは仕方なさそうに顔を縮めるようにして、門の中に消えた。
先ほど、間違えて曲がった横道のところまで来て、彼は先ほど停車していた車と中の男のことを思い出した。きっと、おばあちゃんが騙されて時計を買ったのは、あの車の男ではないかと思った。
バス停で時刻を確認し、やおらポケットから紙包みを取り出すと、急いで中を開けた。ぴんとした一万円札が一枚だけ、丁寧に折り畳んで包まれていた。期待した額ではなかったので洋一はいささかがっかりして、包んであった紙をくしゃくしゃに丸めるとバス停の屑篭に投げ捨てた。そうして札を財布に無造作に入れた。バス代を用意するため思

い返してすぐまた財布を取り出し、小銭を片手に握ってから力なくベンチに腰をおろした。

座ってから、はっ、と気づいて、彼はとっさに足元を見た。

薄暗いアスファルトの上に蛾の黒い斑点のある体はぴくりとも動かずに横たわっていた。息の根も止まって蟻たちの思うままになっている羽は、哀れに無数の食い千切られた跡を晒しながら、静かに横倒しになってそこにあった。何で死んだのかこの哀れな虫は。寿命だったのか。老いて、ベンチの下に落ちたのに違いない。周囲を取り囲む蟻たちの動きに余裕があり、もう逃げようのない獲物の周りを効率よく、自分たちの巣まで運び込もうと体を小刻みに動かして、他を煽動していた。

バスが、隆起した車道の向こう側に姿を現した。慌てた洋一は掌の小銭を確かめて立ち上がった時、思わず足元の蛾を踏んづけていた。